

故郷の鳴門

「故郷の鳴門」自体、生まれてから18歳で鹿児島島に参りますまで、私にとりましては、まさに”空気”のような存在であり、日々を淡々と過ごして来ました。鳴門といえば「渦潮」ですが、「鳴門の渦潮」は、直径20メートル～30メートルに達する“大渦”ですが、いつでも観られるものではなく、春と秋の大潮の季節の満潮と干潮の前後1時間しか、大きな渦潮は観られないのです。

さらに、鳴門公園のある海辺の丘の上からでは、渦潮までの距離が遠すぎて良く見えません。「観潮船」に乗って渦潮のすぐ近くまで行かないと、迫力のある渦潮を観ることは出来ません。鳴門と淡路島を結ぶ「大鳴門橋」が出来上がりましてからは、その橋の歩道橋に設置されている「観潮室」から眼下に渦潮を観ることができるとのことですが、私は、「鳴門の第九」にソリストとして招かれた時等に帰郷することはあっても、まだ、一度も、「観潮船」や「観潮室」から、実際の“鳴門の渦潮”を観たことがありません。徳島でのニュース番組のオープニングの映像や、記録映画の中で、「鳴門の渦潮」の映像を見たことはあるのですが、実際には、自分の目で「鳴門の渦潮」を直接見たことが一度もないのです。まさに“空気”のような“ふるさと”とは、そのような一面があります。今、この文章を書きながら、次回、鳴門に帰ることがあれば、ぜひ、この目で、本物の「鳴門の渦潮」を観ておかなければ・・・と“焦り”を感じています。鳴門の渦潮の詳細については、下記のURLをご参照ください。機会がありましたら、ぜひ皆様にもご覧いただけたらと存じます。

[鳴門の渦潮について | 鳴門市うずしお観光協会 \(naruto-kankou.jp\)](http://naruto-kankou.jp)

私が生まれたのは、鳴門市撫養町林崎という鳴門市中心部からは外れた路地裏でした。祖父母、両親、弟と私の三世代が一つ屋根の下に暮らし、両親はともに学校の教師をしており、私は、主として祖母の世話で育った“おばちゃん子”でした。自宅から近い距離の精華幼稚園、林崎小学校、鳴門市第二中学校に、徒歩通学を行い、高校生になって初めて、大学受験に備えて、徳島市内の徳島県立城南高等学校に進学して、汽車通学を行いました。



幼稚園から中学校までは、山も谷もない淡々と日々を過ごしたのですが、敢えてエポックを挙げれば、幼稚園の学芸会で「桃太郎」を演じたことと、中学生の時に徳島県の独唱コンクーに出場したことです。

この独唱コンクールの件は、このホームページの「プロフィール」の下段の[インタビューによるプロフィール紹介\(米澤傑テノールリサイタル徳島リーフレット 裏面より\)](#)、あるいは、「近況報告」の下段の「リーフレット」の[裏面\(インタビュー記事\)](#)をご覧くださいと、前半の部分に、中学校から高校にかけての「音楽との出会い」について詳しく書かれています。

幼稚園の学芸会での“桃太郎”、思春期に差し掛かった頃の“独唱コンクールでの予選通過”が、その先の「舞台上で歌う」という私の「音楽」の基盤になりました。

ここで、高校2年生の時に出場した「NHK のど自慢」について少し詳しく述べます。その頃の「NHK のど自慢」は、現在のようなバラエティ番組ではなく、かなり「コンクール」という側面を持っており、「歌曲の部」「民謡の部」「流行歌の部」と3部に分かれて審査が行われていました。私は、徳島県大会の「歌曲の部」で優勝し、四国大会まで進んだのですが、残念ながら第2位に終わりました。その理由はハッキリとしています。私は「オーソレミオ」を歌いましたが、このホームページの「歌唱映像」の「オーソレミオ - 米澤 傑 テノール・リサイタル in 徳島 (2021年7月8日)」でお聴き頂けますように、2番の聴かせどころである「Ma n'atu sole」を長く伸ばしました。ところが、NHK が依頼していた男性ピアノ伴奏者が、事前に打ち合わせをして、リハーサルでは長く伸ばしていたにもかかわらず、本番では“いじわる”をされ、楽譜通り弾いて、長く伸ばしている私の歌とズレが生じたので減点となり、優勝できなかったのです。もし、ピアニストがきちんと合わせてくれていたら、優勝して全国大会へ進めたのに・・・と思うと、今でも“悔しさ”が込み上げてきます。今でも、その時のピアニストの顔も名前もハッキリと覚えています。ここでは敢えて述べません。まあ、その“復讐”は、全日本カンツォーネ歌手コンクールである「太陽コンコルソ・カンツォーネ・イタリアーナ」での優勝や、「日本クラシック音楽コンクール」での声楽部門第1位、さらに、全ての部門での“グランプリ”獲得などで十分に果たせましたので・・・。

少し、話が逸れますが、その2つの全国コンクールでのちょっとした逸話を紹介します。全日本カンツォーネ歌手コンクールの「太陽コンコルソ・カンツォーネ・イタリアーナ」では、まず、自分の歌を録音した音源を送付して予選を受けるということで、私は、このホームページの「道中二足のわらじ」に掲載されています『私の音楽活動のひろがりへの道』の最初の部分に記載されている自主制作のCD「米澤傑 テノールコンサート」を送りました。後で伺ったお話しですが、私のCDをお聴きになられたコンクール主催者「日本カンツォーネ友の会」の会長様が、ご自分のお弟子さんをはじめ、コンクールを受けようとしている知己のカンツォーネ歌手の方々に「今年は、凄いテノールがコンクールに応募して来ているから、出場しても1位にはなれないよ！」とおっしゃったとのことでした。

「日本クラシック音楽コンクール」での最終本選で、私は、オペラアリア「清きアイーダ」を歌いました。最後の“盛り上がり”にゆく前に、レチタティーボを歌う場面で、私は、間違っしてレチタティーボの歌い始めが遅れてしまったのですが、ピアノ伴奏をしてくれていた妻は、何事もなかったように、ピアノ伴奏を少し長引かせてくれまして、何の不自然さもなく、レチタティーボから最後の“盛り上がり”に進むことが出来、声楽部門第1位・グランプリ獲得という栄誉を得ることが出来ました。まさに、妻に“感謝、感謝・・・”で、上記のNHK のど自慢四国大会でのピアノ伴奏者とは大きな違いです！

このホームページに掲載されている「10歳代の米澤傑」をさらに遡り「幼少児期から中学校までの米澤傑」について述べましたが、「10歳代の米澤傑」に書かれている高校時代以降に比べて、特に、これと言ったエピソードメイキングなこともない幼少児期でしたが、優しくも厳しい祖母に接し続けた幼少児期に、私の性格形成の基礎が築かれたといっても過言ではありません。また、よく振り返ってみますと、件数は決して多くはないのですが、私の「医学」と「音楽」の「根本」が見えてきます。上記のように、両親が共働きでしたので、私の幼少時期は、祖母に面倒を見てもらうという完全な“お婆ちゃん子”でした。基本的にはとても優しいお婆ちゃんでしたが、イタズラ等をした時には、ズボンを下ろされて、お尻を平手打ちされるという厳しい面もありました。まさに“一身一体”で祖母と暮らした幼少児期でしたので、祖母が亡くなった小学校6年生の時には、祖母の臨終を見届けた後、思わず外に飛び出し「絶対に死なない薬をつくる！」と叫んだのを、今でもハッキリと覚えています。私の幼少児期の性格形成の根本であった祖母の死は、私の「医学」への道の深層心理的基礎となりました。

私の「医学」が、単に、“医療”だけではなく、“医学研究”という道へ進むのには、父の弟である私の叔父の影響があります。叔父は、高校時代までは私達と同居しており、私もとても良く可愛がってもらいました。早稲田大学理工学部に進学し、橋梁設計の勉強をして大学を卒業する頃に、その叔父が、大学院進学について、自分の兄である私の父にさかんに相談をしており、「教授が研究をさらに進めるために大学院への進学を進めてくださっている」というようなことを良く話しており、幼心にも“大学教授”という職業があり、敬愛する叔父が自分の将来について相談をするくらい価値の高い職業なのだと思います。その後、大学教授の重要な仕事の一つが「研究」であることを知り、“研究への憧れ”になったのです。幼心の“誓い”と“研究への憧れ”が合体して、最終的に、医学部教授という職に就いたということになります。

鳴門市には、1918年（大正7年）6月1日に、ベートーヴェン「第九」交響曲が、アジアで初めて全曲演奏されたことを記念して、「第九」が演奏された徳島県鳴門市にあった「坂東俘虜収容所」の跡地近くに「ドイツ館」という立派な“第九記念館”があり、第九初演から、その後の第九演奏会に関するあらゆる資料が展示されています。第九アジア初演 100周年の2018年6月1日には、その記念として、ドイツ館前の広大な広場で、100年前を再現した男性ばかりによる「よみがえる第九」という野外演奏会が開催され、私はテノールソリストを務めました。ドイツ館には、「鳴門の第九」に関するあらゆる資料が展示されており、1998年5月31日に、私がソリストを務めた「80周年記念第九」（「蘇る第九」と題された男性ばかりでの「日本初演再現演奏会」で、ソプラニストの岡本知高さんは、この演奏会でデビューしました。）の映像等も観られるのですが（www.youtube.com/watch?v=5SbCQB8YCsA）、私自身は、「鳴門の渦潮」と同じ現象で、この「ドイツ館」をじっくりと観覧したことがありません。「いつでも行ける」という安易な気持ちで、「鳴門の渦潮」と「ドイツ館」に共通したもので、自分の年齢を考えると、元気なうちに、この2名所を“まじめ”に訪れておこうと思いはじめています。

私が、自分の故郷である鳴門が「第九」日本初演の地であると知りましたのは、「私の音楽活動のひろがりへの道」に書かれていますように、高名な指揮者の井上道義先生よりお声かけを賜わり、NHKの「第九をうたおう」という番組にテノールのソリストとして出演した時の、まさに“本番中”でした。番組中に、井上先生と4名のソリストによる座談会のコーナーがあり、その時に、井上先生が「日本で第九が初めて演奏されたのは、第1時世界大戦の際、徳島県鳴門市板東というところに、敗戦国であったドイツ兵の「板東俘虜収容所」があり（「俘虜収容所」の写真をお示しになりながら）、ここに1000名ものドイツ兵が収容されていて、その収容所の松江豊壽所長が大変素晴らしいお人

柄で、ドイツ兵に自由を与え、周辺住民達との和気藹々とした交流があり、そのような雰囲気の中で、俘虜収容所にもドイツ兵達がオーケストラを編成し、住民達もドイツ兵達が演奏する西洋音楽を聴く機会があり、そうした中で、1918年（大正7年）6月1日に、板東俘虜収容所で、日本で初めて（実質上、アジアで初めて）、ベートーヴェン「第九交響曲」が演奏された、ということをお話しになりました。まさに、私の生まれ故郷の鳴門市で「第九日本初演」があったことを知り、座談会の録画後すぐに、井上先生に、「鳴門市は私の生まれ故郷です！」と申しあげましたのを、今も鮮明に思い出します。

このホームページの「イタリアテヒューを断るといってもったいないお話」に書かれています「第15回記念第九演奏会」に際しまして、松本美和子、伊原直子、米澤傑、多田羅迪夫、という（”鳴門出身”の特典を持つ私は置いておいて）当時の日本最高のソリスト陣が決まっていながら、たまたま、私が、演奏会の半年程前、ちょうど帰省した折に、「第九をうたう会」事務局に挨拶に参りました際、「米澤先生、実は、まだ、指揮者が見つからないんです。井上道義先生にお願いしてみてくださいませんか。」と言われ、腰を抜かすほど驚きましたが、すぐに、その場で、井上道義さんにお電話をしましたところ「演奏会の期日の6月2日には、僕は既にオーチャードホールでのコンサートが決まっているから無理だけど、それじゃあ、鳴門市も困るだろうから探してあげるよ。」とおっしゃって、トーマス・ザンデルリンクさんに頼んでくださり、ギリギリセーフで、「第15回記念第九演奏会」が出来たという”裏話し”があります。その後も、トーマス・ザンデルリンクさんは「第16回」と「第17回」でも指揮をくださり、「第17回」では、私も、再度、トーマス・ザンデルリンクさんの指揮のもとで歌わせて頂いております。

（2021年12月19日記）